

図書館情報学橋会会報 第19号(通号25号)

2016年3月発行 発行者 社団法人茗溪会支部図書館情報学橋会

素晴らしき先輩達の心意気を繋いでいきたい 13

半世紀以上を図書館界発展に尽くした石山洋さん

図書館情報学橋会会長 森 茜

同窓会統合・発展の真の立役者

石山洋さんの訃報に接したとき、私の頭の中は、遠い記憶が一挙に湧き戻り、怒涛のように押し寄せ、日本図書館界発展にとって、未曾有の変革期であったあの10年が今さらのように体中を駆け巡った。

古い手帳を繰ってみると、私が初めて石山さんにあったのは1998(平成10)年5月26日の12時だ。場所は、当時の図書館情報大学(以下、図情大)の学長室。学長は吉田政幸先生。つまり私は学長の随席だ。私はその年の4月1日に図情大の事務局長に就任したばかりで、状況もよくわかっていない。石山さんは、井上哲也さんと今は亡き岩淵泰郎さんの3人で来学された。話というのは、図書館職員養成所が母体となって図書館短大の卒業生までを対象として活動実績もある橋会(以下、旧橋会)を、別個に創設された図書館情報大学の卒業生で構成する図書館情報大学同窓会(以下、大学同窓会)とを統合させてほしい、というものだ。私は知らなかったのだが、図書館情報大学は、政府の肝いりで科学系(情報学系)として創立され、科学として発展させるため旧弊の図書館学と決別する運営を旨とし、それが同窓会にまで及んでいたのだ。会談後、すぐに学長室に呼ばれた私が、吉田学長の間で答えて、両同窓会の統合を急ぐこと、丁度大学創設20周年を迎える折なので、養成所創設から数えて創設80周年になることを併せて「開学20周年創基80周年」と謳って、同窓生を一つに糾合することを勧めた。吉田学長は直ちに大学同窓会の会長をしていた寺沢さんと呼んだ。寺沢さんたちは元々橋会との連携を深めたいと願っていたので、話は速やかに運んだ。

同窓会と大学の密な連携が誕生

こうして生まれたのが図書館情報大学同窓会橋会だ。石山さんは、旧橋会の会長を退かれ監事の立場だ

ったが引き続き監事となった。この時を機に、図情大は大学院博士課程情報メディア研究科の創設を実現し、「特別展 メディア それぞれの時代」という大規模展示会を東京で開催し、大学と同窓会と絆を強め、寺田光孝教授(1971年卒)による労作「図書館情報大学同窓会橋会八十周年記念誌」において図書館情報学の発展と輩出した人物伝を纏め、石井啓豊教授(1975年卒)と岩淵泰郎氏(1954卒)の尽力による「卒業生名簿1922-2001」を発行する等、一挙にフィジビリティを高めていった。

今に続く、橋会と大学との協力協調体制はこの時期に確立されていったと言って過言ではない。

筑波大学との統合と同窓会の発展

ときは大学統合の波の中、図情大と筑波大との統合の噂が囁かれ始めたころだ。その後2年をかけて、2002年10月1日に正式に統合するのだが、大学統合の過程の中で、卒業生の帰属意識を如何にして保つかは大きな課題だった。

私は図情大閉学と共に職を離れ民間にいたが、石山さんが監事をしていただいていた大学同窓会橋会の理事となった。石山さんは、80年を超える学窓の仲間たちが新設なった筑波大学の図書館情報学群の卒業生と共に今の日本の図書館界で自信をもって活躍できる基盤づくりの重要性を強く認識され、大学同窓会の筑波大学の同窓会組織である茗溪会への統合の実現に、共に力を注いだ。

図書館界に幅広く永い影響

石山さんは、時代感覚にも優れ、本誌2頁で紹介されるように生涯を通じて日本の図書館界に尽くされた。そのような方が、私たちの同窓会を育て、後輩たちへ生きる世界を広げ、つなぎ続けてくださったことに感謝したい。会報12号を参照願う。

石山洋さん 追悼 —ご経歴と業績—

本会会員 石山 洋 (いしやま ひろし) さんは、去る1月16日にご逝去されました(88歳)。石山さんは、文部省図書館職員養成所をご卒業の後、図書館司書としてだけでなく、図書館学、書誌学、科学史・洋学史、地理学等の多方面にわたる研究者としてもご活躍され、また、橘会においては会長、監事を務められました。石山さんの長年にわたるご貢献に感謝し、ご冥福をお祈り申し上げます。

ここでは、石山さんの図書館関係のご経歴と業績をご紹介します。

図書館職員養成所を卒業

石山さんは、1951年に図書館職員養成所の第2期生としてご卒業になりました。石山さんは養成所に入学されたとき既に、東京大学理学部地理学科の学生でした。「私は・・・司書への道を求めて、大学には内緒に養成所へ入所、卒業は両方一緒であった。旧制大学が授業の出欠をとらなかつたことと養成所が新制高校卒レベルを入所資格としていたのでわれわれには語学や教養科目の授業免除をしていたので、二つの学校を同時にすることができた。」(文献①)

国立国会図書館で索引、書誌情報の電算化を推進

石山さんは、ご卒業後、在学時からアルバイトをしていた最高裁判所図書館に就職され、翌年、1952年8月に国立国会図書館上野図書館に異動となり、その後、国立国会図書館で1989年までお勤めになりました。国立国会図書館では、参考課、整理課などでお仕事をされ、索引課長、電子計算機課長、外国逐次刊行物課長、司書監、図書館研究所長を歴任されました。

国立国会図書館では、特に、索引、書誌関係の業務とその電算化を推進されました。石山さんは、1964年7月から73年3月まで10年近く、索引課において『雑誌記事索引・科学技術編』のエディターを担当されました。当時はコンピュータはなく、『索引』の編纂は手作業でした。その後異動を経て、1975年4月に索引課長として再び『索引』の編纂に携わることになりました。「私の図書館員人生の4分の1は索引づくりであった」(同)。今回は課長として『索引』編纂の電算化を推進され、1975年採録分から電算編纂となりました。

石山さんは、『索引』の電算化の実績を買われ、1978年に総務部電子計算機課長となり、JAPAN MARC フォー

マットの開発を進められました。「私の在職時代の最大の開発は和図書のデータベースの確立であった」

(同)。LC MARC を基礎に漢字処理を含めた MARC フォーマットを策定するに当たり必要な項目や機能を要求書として石山さんがとりまとめられました。石山さんは、関連して JICST (JST の前身) との共同研究により第16回丹羽賞学術賞を1982年に受賞されています。

今日、図書目録や雑誌記事がデータベース化され、当然のように図書館の内外からネットワークにより検索されていますが、この基礎の構築には石山さんのご尽力があったといえるでしょう。

石山さんは、国立国会図書館をご退職された後、東海大学教授(1989~1998)、図書館流通センター会長・顧問(1998~2000)を務められました。

また、日本図書館協会では、分類委員会委員長として日本十進分類法新訂9版の編纂を指揮されました。ここには養成所在学時代の第6版相関索引作成の(森清先生)助手の経験が生きているのかもしれませんが。

同窓会での活躍

石山さんは、卒業後早くから同窓会活動にも参画されました。同窓会30周年に際しては、記念事業の復刊機関紙「図書館研究」の編集を手伝われ、また、養成所の大学昇格の文部省陳情に弥吉光長同窓会長にご一緒されています。その後、「旧橘会」(養成所・図書館短期大学同窓会)の会長を務められ、また「図書館情報学橘会」の監事を長年にわたって担われました。

「図書館情報大学同窓会橘会八十周年記念誌」には、編集委員としてご尽力いただきました。

ここに改めて石山さんの図書館界でのご尽力とご功績に感謝いたします。

ご著書から

「目録作成の技法」、日本図書館協会、1986、〔共著〕
「源流から辿る近代図書館」、日外アソシエーツ、2015
「科学史研究入門」、東京大学出版会、1987、〔共著〕
※著書・論文多数、文献①の石山さん著作目録を参照。

主な参考文献

- ①「書誌作り半生の素描」、石山洋 in:「文献探索1999」、2000
- ②「図書館情報大学同窓会橘会八十周年記念誌」、同編集委員会、2002
- ③ 本会「会報」、第12号、2011

(文責：橘会理事 栃谷泰文 [図短特課 昭和53])

公開講演会を開催

高齢化社会と日本：図書館サービスの再考

筑波大学図書館情報メディア系 教授
溝上 智恵子

12月6日（日）、筑波大学文京校舎を会場に、溝上教授をお招きして、公開講演会を開催した。公共図書館司書など約40名の方が参加しご講演への質問も相次ぎ盛会となった。以下に要旨を紹介します。

1. はじめに

日本は世界に先駆けて高齢化が進行しており、これに対応して図書館サービスを再考することは喫緊の課題です。文部科学省も報告書『長寿社会における生涯学習の在り方について：人生100年いくつになっても学ぶ「幸齢社会」』（2012年）で、「公民館・図書館・・・（略）・・・は、多様な学習プログラムを企画・提供することができる地域の学習拠点」と指摘しています。生涯学習を实践するうえでも公共図書館の役割は重要になっています。

2. 高齢化社会が進展する日本

日本における高齢者（65歳以上）比率は総人口の26%を越え、既に超高齢化社会（21%以上）に突入しています。さらにその速度も速く、高齢者倍加年数がフランスは100年以上を要したのに対して日本はわずか26年で達成してしまいました。

このような中で、高齢者へのイメージには、①「福祉・保護」イメージと②「生活者・活動者」のイメージの二重性がみられます。

3. 高齢者をめぐる図書館サービス

元来、日本の図書館サービスにおいては、高齢者像は「福祉・保護」イメージが強く、そのサービスも障害者サービスの枠組みに位置づけられてきました。確かに高齢者は障害者と重なるところもありますが、今後は「生活者・活動者」イメージを意識した図書館サービスも積極的に構築する必要があります。

高齢者を独立したサービス対象のカテゴリーとして考える必要性は、①高齢者がすべて障害者ではないこと、②エイジズム（年齢による差別）につながるのを避けるため、③地域によって既に図書館利用のマジョリティ（多数者）となっているから等々の理由をあげることができます。



4. 超高齢化社会における図書館サービスの事例

国内外で行われている事例を紹介しましょう。

事例① 情報格差解消をめざす図書館サービス:カナダのプリンス・エドワード島では、高齢者対象のコンピュータスキル向上のプログラムを開講し、十代の生徒をパートナーして活用して情報格差の解消に成果をあげています。

事例② 認知症にやさしい社会の構築と図書館サービス:イギリスのノーフォークの図書館では、医療関係者と連携して認知症者のための図書リストを作成したり、回想法に用いるコレクション（図書やグッズ）を整備し貸出を行っています。出雲市立ひかわ図書館も介護施設で回想法を実践しています。

高齢者サービスをより充実させるためにも、高齢者の生活情報行動をデータに基づいて議論することが必要です。私たちの研究グループは、現在、このための研究を進めているところです。

5. まとめ：これからの高齢者サービス

公共図書館の高齢者サービスを一步先に進めるためには、①サービス対象の人口構成の把握、②高齢者の利用状況とニーズの把握、③自治体の計画・施策に基づくサービスの企画・立案が求められます。そして図書館から利用者（高齢者）への一方向のサービス提供から双方向へと転換をはかり、コミュニティの中の図書館の意義を深めることが必要です。

参考文献：溝上智恵子他編『高齢社会につなぐ図書館の役割』学文社、2012

☆ 活躍する同窓生：会員便り ☆

大学を卒業して早4年

金子 芙弥

筑波大学情報学群 知識情報・
図書館学類平成24年卒業

2012年春に大学を卒業してから早くも4年が経とうとしています。大学での4年間もあっという間でしたが、この4年はそれ以上に早く感じています。私は、2015年1月より九州大学附属図書館で働いています。それまでは、公共図書館で働いていた私にとって、大学図書館と公共図書館の違いは予想以上でした。中でも、カウンターにおける直接業務に関する比重の違いには驚きました。3年近く公共図書館で働いた中で、カウンターで利用者と接してこそ図書館職員という意識が植え付けられていたので、大学図書館の管理系の係は全くカウンターに立つことがないことに衝撃を受けました。当初は、慣れ親しんだカウンターを行えるサービス系に配属されたことにほっとしました。主に担当している業務は、図書館における企画展示、イベント、利用者向けの広報などです。5月に行う貴重文物展示に向けて、企画を始動させています。仮名の発達に関する貴重資料をどのようにしたら分かりやすく紹介できるか、監修をしてくださる先生と悩む日々です。

また、九州大学は、キャンパス移転の真っ最中で、図書館も新中央図書館を建設中です。新中央図書館

は、この秋に一部開館し、2018年度の秋に全面開館を予定しています。そのため、資料の移転・配架計画や書架・閲覧席の配置計画など、図書館の移転に関する業務を分担して行っています。歴史ある大学のため、一筋縄では行かない部分も多々ありますが、新しい図書館を創ることはなかなか経験できることではないので、移転完了までにどのようなことに携わっていけるのか、わくわくしています。

(かねこ ふみ)



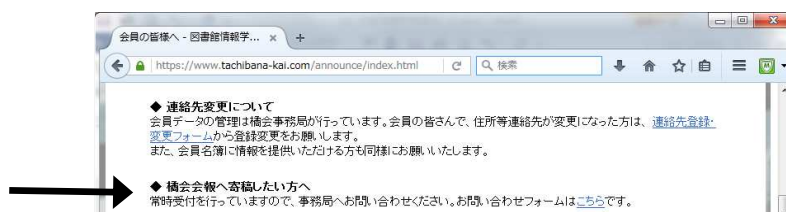
(参考) 九州大学新中央図書館外観イメージ

◆ 橘会会報にご寄稿ください ◆

同窓会・クラス会や、同窓会員・卒業生のみなさまの活動を、是非ご寄稿ください。ホームページからお問い合わせください。

橘会ホームページ <http://www.tachibana-kai.com>

→会員の皆さまへ → 橘会会報へ寄稿したい方へ (お問い合わせフォーム)



☆ 卒業生の活動拝見 ☆

自著を語る：

『ちょっとマニアックな図書館コレクション談義』

内野 安彦

図書館情報大学情報メディア研究科
情報メディア専攻（博士前期課程）平成14年修了

書店員と司書、単純に言えば共に本を扱う仕事である。書店員にはカリスマと称される人がいるが、図書館員にはいない（と思う）。カリスマか否かは別にして、書店員が書いた読書案内の本はたくさんあるのに、図書館員が書いたものは何故か児童書を除くと僅少である。一般の読者はこのことについて不思議に思ったことはないのだろうか。おそらく、書店員も図書館員も考えたことすらないことなのではないか。

ブログやフェイスブックに投稿される図書館員の本の紹介は面白いものが多い。ならば、こうした自由な表現で現職の図書館員による公共図書館コレクション論を編めないか、と企画したのが本著である。前半は私が日本の出版流通と図書館との関係の課題を論じ、後半は私も含め5人が全く統一性のない図書館コレクションへの熱い思いを綴った。

この十数年、公共図書館の選書の在り方に対する出版業界からの批判を見聞する度に思い出すのが、図書館情報大学講演録『知の銀河系』の「刊行あたって」で、当時の吉田政幸学長が述べられた次の言葉である。

「知りたいと思う欲求と知らせたいと思うその絶え間ない繰り返しが、知の銀河系ともいえるような膨大な量の書を生み出した。」

私はこの言葉を糧に図書館員として14年間、現場において図書館コレクションの在り方を考えてき

た。本著がコレクション談義にとどまらず、図書館サービス談義のきっかけとなれば幸いである。

(うちの やすひこ)

書誌事項：

ちょっとマニアックな図書館コレクション談義 / 内野安彦編著.-- 岡山：大学教育出版, 2015.11.-- viii, 164p ; 19cm.-- ISBN 978486429382 1,600円 (本体)



◆ フェイスブックもご利用ください ◆

橘会では、フェイスブックからも会員みなさまに情報を提供しています。ぜひ、ご活用ください。

<https://www.facebook.com/lib.info.tachibanakai/>



臨時総会が開催されました

——図書館情報学橋会の茗溪会支部加盟からの退会について方向性が承認されました——

平成 27 年 12 月 6 日（日）、橋会主催の公開講演会終了後に、臨時総会が午後 4 時 5 分から筑波大学東京キャンパス文京校舎 121 番講義室で開催されました。この臨時総会は、10 月 10 日付けで理事会から「図書館情報学橋会の茗溪会支部加盟からの退会について」が提案され、橋会会則第 19 条に基づき開催されたものです。

会員総数 1,656 名のうち出席会員は 25 名、議決権行使の委任は 126 名ですべて議長への委任でした。なお、今臨時総会は会則変更が議題ではありませんが、会則変更に係る議決要件(会員総数の 30 分の 1 以上)を満たすものでした。

会則第 19 条 2 に基づき森会長が議長として議事を進行しました。

議題 1：図書館情報学橋会の茗溪会支部加盟からの退会について

議題 1 の「図書館情報学橋会の茗溪会支部加盟からの退会について」の提案理由については、平成 27 年 10 月発行の橋会会報第 18 号(通号 24 号)に同封された「図書館情報学橋会臨時総会開催のお知らせ」に記載されていますが、橋会は平成 16 年 5 月に筑波大学の同窓会である茗溪会の支部となったこと、橋会を通して納入されている茗溪会会費の橋会への支給が 350 円（会費の 1 割）にすぎず、橋会運営に大きな支障をきたしていること、筑波大学として同窓会組織の再編に着手していること、これらを踏まえて、橋会会員の経済状況に鑑みると、茗溪会会費に加えて橋会会費をお願いするのは難しいこと等の理由から、理事会として会費を有効利用するために茗溪会支部としての加盟を退会することを提案したこと、についてあらためて寺沢副会長から説明がありました。また、来賓の中山筑波大学副学長兼附属図書館長から筑波大学で整備している校友会組織について紹介があるとともに、森会長から橋会の活動経緯について補足説明がありました。

これに対して、筑波大学校友会と同窓会組織と

の関係、今後の会費の取り扱い等についての質問や、橋会としての活動に独自色を出すべき、橋会として同窓会活動を行っており茗溪会は活用していない、コンパクトに長く続く同窓会活動を実施すべき等の意見が出されました。

この後、理事会提案である図書館情報学橋会の茗溪会支部加盟からの退会の方向性について採決を行い、特に異論がなく承認されました。

議題 2：個人会員として茗溪会に残る方法

議題 2 の「個人会員として茗溪会に残る方法」については、議題 1 の質疑応答の中で森会長から橋会としては茗溪会支部を退会するが、個人として茗溪会会員として残ることは可能であり、その場合は会費を橋会と茗溪会の両方に払う必要があると説明されました。なお、選択肢としては、橋会のみへの参加、茗溪会のみへの参加、その両方への参加、があることが補足されました。

議題 3：今後のスケジュール

議題 3 の「今後のスケジュール」については、森会長から今回茗溪会支部加盟からの退会の方向性が承認されたので、平成 28 年 5 月開催予定の茗溪会の理事会・代議会で退会手続きをとり、平成 28 年 7 月開催予定の橋会総会で正式に決定しあわせて会則の改正を行うとの説明がありました。

その他

その他として、森会長から婦人司書の会の有志から橋会に対して寄付の申し入れが来ていることの報告があり、協議の結果、寄付を受け入れることが承認されました。なお、受け入れた寄付の取り扱いについては理事会で検討することになりました。

以上で議事が終了し、午後 5 時 15 分に閉会しました。

(文責：橋会副会長 関川雅彦 [図短特課 昭和 54])

平成 28 年度分 会費納入のお願い

橘会会員におかれましては今年度の会費について、以下の郵便振替口座または銀行口座宛に納入くださるようお願いいたします。なお、通常会員の会費は 3,500 円です。また通常会費完納者(35 回分納入済みの方)には、橘会円滑な運営のため橘会固有の協力会費 2,000 円を維持費としてお願いしています。

(郵便振替)

口座番号 00110-5-656101

加入者名 図書館情報学橘会

(銀行振込)

ゆうちょ銀行 〇一九店 (ゼロイチキユウ店)

口座番号 0656101 預金種目 当座

口座名義 トシヨカンジヨウホウガクタチバナカイ

※「振込依頼人名」欄に会員番号の入力をお願いします。

◇ 理事の交代予定 ◇

4月1日をもって、上保 秀夫さん(筑波大学図書館情報メディア系)から平久江 祐司さん(同)に交代となる予定です。

◇ 会員現勢 ◇

1. 会員数

1,652 名 (平成 28 年 1 月 31 日現在)

2. 卒業校別内訳

卒業校	人数	卒業校	人数
文図教習所	1	図大図情専	11
文図講習所	51	図大図情	531
国図附養	1	図大図情修	17
文図養成所	66	図大博前期	11
文図養成 A	155	図大博後期	1
文図養成 B	52	筑図	145
文図養成 1 B	3	筑博図情修士	3
文図養成 2 B	9	筑博図後期	3
図短付養成	20	筑博図情前期	4
図短特養課	115	筑知図	78
図短図書館	296	筑図情	2
図短文献情	77	合計	1,652

社団法人茗溪会支部図書館情報学橘会

〒305-8550 つくば市春日 1-2 E-mail info@tachibana-kai.com

公式ホームページ <http://www.tachibana-kai.com/index.html>

発行: 2016 年 3 月 10 日